ケロロ軍曹と魔法少女リリカルなのはのクロスオーバー小説

パトリオットで国士で愛国者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケロロ軍曹と魔法少女リリカルなのはのクロスオーバー小説

【Ｎコード】

Ｎ５３０６Ｘ

【作者名】

パトリオットで国士で愛国者

【あらすじ】

ケロロ軍曹と魔法少女リリカルなのはのクロスオーバー小説です。

ケロロ、八神家上陸であります

西暦２００４年、地球は突然謎の地球外生命体に襲われた。
空を覆い隠すＵＦＯの群れ、
残酷にして冷酷無慈悲な侵略者、
逃げ惑う人々、
圧倒的な科学力の差、
警察も防衛軍も為す術もなく敗れ去り、
そして地球は新たなる支配者を迎えることになるはずだったのに、
はずだったのに・・・・・・。

日本国　神奈川県
２００４年４月１日　午前７時

此処はとある少女の部屋。

「春眠暁を覚えず」とはよく言ったもので、春の眠りは実に心地良い。
この部屋の少女も例に漏れず実に気持ちよさそうにベッドで寝息を立てている。
そんな折、午前７時００分００秒とデジタルな時計が時刻を刻み目覚ましの電子音が鳴り始める。
ベットに寝ていた少女がゆっくりと上体を起こし目を擦る。
「もう朝かいなぁ～。」
そう呟きつつ、左手で目覚ましのアラームを止める。

足が不自由なその少女はベッドから車椅子に移るべく、ベッドの側面に四苦八苦しながら体持っていく。
そして何とか苦労して車椅子に移った少女はカレンダーに目をやる。

「そういえば今日はエイプリルフールなんやな。」

その瞬間、少女は突然孤独感に襲われた。
両親に先立たれて一人で暮らしているこの少女は、数週間に1回ぐらいのペースで突然、何の前触れもなく、強烈な孤独感、喪失感に襲われることがある。
一種の心理的な発作といえるだろう。
この少女がわずか9歳ということを考えれば当たり前のことだろう。
この突然の孤独感に毎回毎回打ち勝って立ち直り一人での生活を続けられているこの少女は9歳とは思えない程の強靭な精神力の持ち主と言えるだろう。

「また来た・・・・・。」

目頭が熱くなって涙がとめどなく流れてくる。その涙は頬を伝って少女の膝に落ちていく。
もう少女の膝は飲んでいたコップの水をこぼしてしまったかのように濡れている。

「家族が欲しいとは、死んだお父さんとお母さんを生き返らせてくれとは言わへん。
せやけど・・・・、せやけど、せめて友達ぐらいは一人でもいいから私に下さい神様・・・。
この際友達は人間じゃなくてもかまへんから、宇宙人でもいいから、だから・・・・。」

その時、ニュータイプ的閃き（ピキーン）とともに天の声（藤原啓治の声）が少女の頭に響いた。

「「あー！あんな所に宇宙人が！ほらカレンダーの左の壁に宇宙人が！」」

突然の天の声に少女は驚いたが、その驚きよりカレンダーの左の壁に対する期待のほうが勝った。

「え、宇宙人！私にも見える？」少女がそう言いながら目を向けたそこには、

「何故・・、分かったでありますか？」

壁紙が剥がれて緑色のカエルみたいな宇宙人が現れてそういった。

顔には汗が滲んでいる。

驚きのあまり少女の顔からはおよそ表情というものが消えていたが、少女の表情はだんだんと明るいそれに変わっていく。

少女は車椅子のタイヤを回し宇宙人に近づきながら、その嬉しさのあまりか、言葉になっていない言葉をつぶやき始める。

「と、と、と」

「と？」

「と、と・・も、とも」

「と・・も？」

「友だちになってください！！宇宙人さん！」

少女がようやくその言葉を出せたときには、少女と宇宙人の距離はゼロになっていた。
少女は宇宙人に抱きついていた。

「ぐ、ぐるじいでありまふ。」

「あ、ごめんなさい。宇宙人さん。」

宇宙人の一言で冷静なったのか少女は、抱きつくのをやめる。
宇宙人は突然のことに驚きつつも、気を取り直してポーズをとって

「吾輩は宇宙人さんではないであります！
吾輩はガマ大星雲５８番惑星ケロン星宇宙侵攻軍特殊潜行工作部隊隊長ケロロ軍曹であります！」

軍人らしく敬礼をしながらそう宣言した。

「ケ、ロロ軍曹？」

「長ったらしい役職名だけど要はペコポンを侵略しに来た宇宙人であります。」

「へー、そうなんや。」

「そーなんやって、御宅、ペコポン人なんでしょ、なのに何でそんなに反応薄いのよさ！
侵略だよ、侵略、ＳＨＩ☆Ｎ☆ＲＹＡ☆ＫＵでありますよ！」

「そんな事より、私と友だちになってや軍曹！ずっと一人で寂しかったんや私。」

涙を目ににじませながら手をとって懇願する少女。

「友達・・でありますか？別にいいでありますが、だけど吾輩はペコポンを侵略にやってきた侵略者でありますよ。」

「そんな細かいことはええんや。私、私は八神はやて。よろしくな軍曹。これから私たち友達やで。」

両親に先立たれてからこれほどまでに嬉しいことがあっただろうか。いやなかった。

少女は満面の笑みでこれから自分たちは友達であるとそう宣言した。

少女のその本当に嬉しそうな表情と「ともだち」その言葉を見て聞いた瞬間ケロロは言いようのない多幸感に包まれた。

「（ともだち、なんと甘美な響き。）分かったであります！はやて殿、これから友達であります！」

そう言ってケロロが差し出した手にはやては握手した。

はやては終始ニコニコしている。ケロロもそれに答えて笑顔を浮かべる。

その平和で友好的な様子はマルタ会談の米ソ両首脳以上であった。

そんな友好ムードの真っ只中、ケロロが持っているケロボールにに通信が入った。

（最初からケロロは右手にケロボールを持っていたがはやては特に

突っ込んでいない。まあ、自分の望みがかなっての宇宙人のエンカウントであるからそんな細かいことなど目に止まらなかったのであろう。）

「あ、本隊からの通信であります。ポチッとな。」

〈ガーガー・・・ガー・・本隊より先行部隊へ、同胞の一部がペコポン人と接触した模様、すこぶる危険な状況である。それに伴い、遺憾ながら本隊は一時ペコポン圏より撤退する。諸君らの救助は断念せざる負えない。健闘を祈る。〉

「見捨てられたってことやの？」

「あ、あの、はやて殿、そのお願いが有るのでありますが・・、そのこの家に居候させて欲しいであります。」

「ええにきまっとるやないか軍曹、大歓迎やー。友達やし。それに、さっきも言ったやろ私な、ずっと一人で暮らしてて本当に寂しかったんや。」

はやてはケロロと出会ってからずっと、いや、出会う直前から目に涙を浮かべているが、今度はケロロの目に涙が浮かび始めた。

「は、はやて殿ー！ありがとうであります。持つべきものは友達であります！」

はやてに泣きながらケロロは抱きそういった。

こうして4月1日この日からケロロ軍曹は正式に八神家に配属され

たのであった。

八神家上陸日のその後のはなし？

日本国　神奈川県　八神宅
２００４年　４月１日　午前８時

一人の孤独な少女と宇宙人の世紀のエンカウントから一時間後、２人はリビングでお茶を飲みながら話をしていた。

「ズズゥー（茶を啜る。）そうでありましたか。
ご両親が・・・、まだ若いっていうか子どもなのに大変だったでありますな。」

そう言って湯のみをテーブルに置く。

「せやな。
まあ、石田先生とか近所の人達は優しいし、さっきいったグレアムおじさんがお金の援助もしてくれていたから生活に困ったりはしてなかったんやけど、一人暮らしは寂しくてかなわへんかったわ。」

「でももう大丈夫や、これからは軍曹がいてくれるからな。」

はやては本当に心底嬉しそうな顔でケロロを見つめた。

「（さっきから思っていたでありますが、子どもなのになんと健気で気丈なこと、吾輩なんだか使命感みたいなものに湧いてきたであります。）任せるであります。
吾輩が来たからにははやて殿に寂しい思いはさせないであります！」

「ところで、はやて殿、学校に行っていないのなら普段は何をしているのでありますか？」

「うーん、家で家事をやったり、出かけて買い物したり、図書館で本を読んだりしてるなあ。」

「ならこれからは吾輩も家事をするので当番制にしようでであります！
あと出かける時は吾輩も手伝うであります。」

「ほんまにいいんか軍曹、ありがとうな！
でも、一緒に出かけるのはちょっと難しいんちゃうかな、ほら宇宙人が外に出たら大騒ぎやで。」

「大丈夫であります！
ケロン軍脅威の科学力を持ってすればペコポン人に化けるなどお茶の子さいさい、うちの子四歳であります！」

・・・・・・・・

「なあ、軍曹？ホンマにそれ大丈夫なんか？」

「問題ナッシングであります。何処からどう見てもペコポン人サラ

リーマンであります。」

説明しよう、はやてが今日は病院に出かける幼児があるということでケロロは今ペコポン人スーツ（量産型、サラリーマン仕様）を着用しているのだ。

「ちょっと変なお面をつけてるとしか思われないであります。そんじゃいってみよー！！」

・　・　・　・　・

病院

「軍曹、道歩いてる時皆こっち見てたで。なんかめっちゃ恥ずかしかったわ／／・・。」

「まあまあ、大丈夫でありますよ。皆宇宙人なんて夢にも思ってないでありますよ。」

（八神さーん、八神はやてさーん、３番へどーぞ。）

「お、呼ばれたでありますよ。

（たしか、石田先生だったでありますか、第一印象が大事でありますから気をつけないと行けないであります。）」

スーツのネクタイと気持ちを締めるケロロ。

「（いざ行かん！であります。）」

「（ホンマに大丈夫やろか・・・？）」

二人はそれぞれの思いを胸に診療室へ入っていった。

「久しぶりね八神さ・・・ん？？！！」

案の定驚く石田先生。

「どうも吾輩、はやて殿の親戚のケロ山ケロ蔵であります！今後通院の際は吾輩が付き添うことになりましたであります、よろしくお願いしますであります。」

石田先生は最初は訝しげにケロロを見ていたが、はやてが大丈夫そうなので取り敢えず信用することにした。

・
・
・
・

家への帰り道で

「絶対変やと思っとたでー、石田先生。」

「問題ない。であります。（キリッ　（スーツを）脱がなければどうという事はないであります。」

スーツの何処からかあのグラサンを取り出しスチャっと掛けながら
そういった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5306x/

ケロロ軍曹と魔法少女リリカルなのはのクロスオーバー小説

2011年10月28日14時11分発行